Z-kan Vol.1

2000 MAY

「自分」から考えるためのLIFE TEXT
［ゼットカン］

大特集
大学なんていらない？

宮台真司はいかにつくられたか？

旅で「自分」は見つかるのか？
小林紀晴

「ガクモン」は役に立つのか？
苅谷剛彦

長い長い？ 学生時代
香山リカ×鷲田清一

Z-kanインタビュー
村山由佳

あなたと地獄に堕ち対話
デーモン小暮閣下

連載開始！
オバタカズユキ「直球・資格図鑑！」
山形浩生「リーマンの、リーマンによる、リーマン（あるいはその予備軍）のための教養講座」
中ザワヒデキ「なにもそこまで説明しなくっても……」　鳥肌実「虎人日記」
石原壮一郎「真理を尋ねて三千里」etc.

連載

なぞ説（なにもそこまで説明しなくっても……）

■ 第一回　文字の風景　ある電飾看板屋さんの説明 ■

美術家　中ザワヒデキ

『二九字二九行の文字座標型絵画第一番』

「いやぁ、あなたでしたか……。朝ここに来たらこんな、文字のひっくり返ったようなのばかりのファックスが来ていていったい何事かと思いましたよ。で、これをどうするんですか？　これが版下原稿ですか？」

お客さまからの電話に、上司がいささか率直すぎる応対をしている。僕も朝、ずいぶん変わったファックスが来たものだとは思っていたけれど、お持ちいただいた原稿の中身にとやかく言うなんて……お客さまが気を悪くされないといいけど。

送信者名がたしか「美術家　中ザワヒデキ」となっていたけど、美術家ってアーティストのことかな？　それに、どうして名前は「中」だけ漢字なんだろう？　うちの会社は電飾看板を主体にカッティングシートやネオンサインなどいろいろやっているけれど、アーティストとの付き合いはほとんどないから、話がまとまったらちょっと面白いかもしれない。

しかし、それにしても大変な絵だな。あれ？「絵」って言ってしまっていいのかな？　業界的には版下原稿として扱う画像は全部とりあえず「絵」と言っちゃうけど、本当は全部文字だから文章なのかな？　うわ……読めない漢字ばかり。そして、つい天地（上下の向き）を確認してしまいたくなるのは、ひらがなが全部ひっくり返っているから。なんか模様みたいで目がちかちかする。でも、左下にあるカタカナはまっすぐなんだな？　あれ？　よく見るとここは「中ザワヒデキ」って書いてあるのか……。そして、その右には縦に飛び飛びに「一九九七」とある。ふーん。しかし、そのほかのところは読もうとしてもどっからどっちに読んだらいいのか、全然わからない。それって、やっぱり文章じゃなくて絵ってこと？　それに、一番外側の四辺は何カ所も一文字分抜けていて、どこから読みはじめたらいいのか全然わからなくなっている。でも、これもきっと、わざとなんだろうな。

……そっか、これって、絵なんだ。文字を並べて描いた絵なんだ。だから、日本人ならすぐ読めてしまうひらがなをひっくり返して、「読むな、見ろ」っていうようなことが言いたいのかもしれないな。でも、漢字だって読めないわけじゃないのに……でも、ひらがなやカタカナは表音文字だけど、漢字は表意文字だ。それに漢字は、音読みしていいのか訓読みしていいのかだってわからない。中国ではどうだか知らないけど、日本では、漢字はもともと耳で聞いたり声に出して発音したりするものというよりは、「見る」ものだったのかもしれないな。

それにしても、この「絵」は、色が無いのがつまんないな。

文字は色!?

上司の話はうまくまとまったみたいで、うちの会社で受注することになった。となると、実際に作業するのって僕なんだよね。お客さまからのご要望は、この絵を大きなライトボックスに、黒のカッティングシートで出力すること。

すると工程としては、まず別途Eメールで受け取ったパソコンデータを完全版下として、全面黒のカッティングシートにカッターマシンでカットを入れる。アクリル板を貼り合わせて作ったライトボックスの上に、そのシートを全面ベタでぴたっと貼る。そして「カス取り」作業が今回の場合は大変そうだ。カッティングシートって一枚の特大のシートだから、手作業でデータの周りの部分（カス）をピンセットで取り去らなければならないのだ。例えば今回の場合、文字と文字の隙間や文字の中の隙間（本来白い部分）を、きれいに剥がし取るらけど。

絵画第一番」1997

ろう。

一三〇センチ四方のアクリル板に無事カッティングシートを貼り終わったので、あとはひたすらカス取りと。何ら考えずに単純作業。とりあえず一番

業する。カスと一緒にデータの一部まで剥がしちゃうことがあるからだ。次第に漢字が、漢字としてというよりは、部首の組み合わせとして見えて

しかし、それにしても大変な絵だな。あれ？　でもこれ、ちょっとなにか言いたいのかな？　業界的には「絵」って言ってしまっていいのかな？　業界的には版下原稿として扱う画像は全部とりあえず「絵」

でも、漢字だって読めないわけじゃないのに……でも、ひらがなやカタカナは表音文字だけど、漢字

そして「カス取り」作業が今回の場合は大変そうだ。カッティングシートって一枚の特大のシールだから、手作業でデータの周りの部分（カス）をピンセットで取り去らなければならないのだ。例えば今回の場合、文字と文字の隙間や文字の中の隙間（本来白い部分）を、きれいに剥がし取るわけだ。かなり細かい文字が沢山あるから、このカス取りは結構な時間がかかるだろう。

でも物量的なことを除けば、全体としては白黒二値データっていうか黒一色だけだから、原理的には最も基本的なやり方で済む。ある意味ではデータと出力方法が一致して、潔いと言えるかもしれない。通常のプリント方式だと図形はインクのしみやにじみでしか表わせないけれど、カッティングシートは、図形の形に切り出された実際の「物体」となる点が違う。今回の場合は文字が、エッジもシャープな物体として出力される。そしてそれが、物質の中の無数の分子を思わせるほど大量にあるわけだ。

仕事に対しては職人として接するから、お客さまのご要望以外のことは考えない。だけれど、これが美術の作品だなんて正直言ってよくわからない。はたしてこういうのが売れたりするんだろうか……アーティストで貧乏って話はよく聞くから、これも売れたりはしないんだろうな。だいたいそんなに安いものじゃないし、こんなに大きくちゃ置いておくだけで大変だ。じゃあいったい、何のためにアーティストなんてやってるんだろう。

一三〇センチ四方のアクリル板に無事カッティングシートを貼り終わったので、あとはひたすらカス取りだ。何も考えずに単純作業。とりあえず右上から取りかかろう。

最初の字「槧」からして読めない。というか、知らない字。でもその下の「横」はわかるから、知らない字だけが並んでるわけではない。ミスをしないように、原稿のプリントを何度も確認しながら作業する。カスと一緒にデータの一部まで剥がしちゃうことがあるからだ。次第に漢字が、漢字としてというよりは、部首の組み合わせとして見えてくる。

数十文字ほどやったところで、はっと気がついた。ここ、右上の文字群には、木偏の漢字が使われている。一番右上の「槧」だけ木偏ではないけれど、でも、「木」の部首がある。右上端の五字×五行のスペースは左辺と下辺を倒立したひらがなで仕切られているが、そのエリア内にある十九個の漢字が、「木」の塊となっているのだ。続けて、下に向かって作業してみよう。

次に現われたのは、「火」または「烈火（煉火、四つ点）」の部首を持つ漢字群。「烈火」の四つの点みたいなのが、カスと一緒に剥がれてしまいやすいので、注意が必要。これらも五字×五行のスペースの中に十九文字ある。

さらにその下の真ん中のところは、「土」。そしてその次は、「金」。「金」はただでさえ画数が多くて細かいから、カス取り屋泣かせだ。そしてここは、「火」や「土」の塊よりも若干濃く見える気がする。

そして一番下に現われたのは、「さんずい」または「水」の部首を持つ漢字群。なんとなく思い出したけど、以前ワープロで出したい字が見つからなくて部首検索しようとしたら、関連のある別の部首の漢字もいっぱい

←『二九字二九行の文字座標型絵画第一番』1997（データ）

に出てきたことがあった。たぶん、ワープロやパソコンに入っているJISの漢字表がそのようにできているんだと思う。だから、「さんずい」と「水」が一緒だったり、「火」と「烈火」が一緒だったりするのは、うなずける。とすると、上から順番に「木」「火」「土」「金」「水」、つまり「木火土金水」となる。

これって、中国の陰陽説における五大元素の「五行」じゃないか!!　しかもそれが、右から五行の中にある。というのは冗談かもしれないけど、作者の中ザワさん、いったい何考えてんだろう。

一服してから見ると、さらに別のことに気がついた。カス取りに没頭していた僕しかわからないかもしれない、とても微妙なことなのだけれど、「木」の文字群を見た後に「火」の文字群に目をやると、なんだか文字が怒ってるような、熱くなっているような印象を受けるのだ。それに対して一番下の「水」の塊は、心なしか流れたりよどんだりするような感じ。そして「金」は硬質な感じだし、「土」は何と言ったらいいのか、黄ばんだ灰色のような朴訥な印象。もう一度「木」を見ると木々の様々な緑が一瞬目に浮かぶようだし、「火」はやっぱり赤系統のいろいろな色。……実際の色は無いのに、なんとなく「色」を感じるのだ。あるいは、なにがしかの感情や感覚が、うっすら瞬間的にわき起こるような気がする。読んだり、一意的な意味を追ったりきえしなければ、漢字はもともと色彩的なものなのだろうか?

文字は色!?　そうするとこの絵は、色を使わないで描いた色彩画ということ?

それにしてもこのカス取り、案の定相当時間がかかる。右の五行だけで半日近くかかってしまった。から、全部終えるのに数日はかかるだろう。全体が完成すると、いったいどんなふうに見えるんだろう。

文字は顔!?

やっと終わった。さすがに疲れた。あまりにも長時間ピンセットを握っていたので、手から離れなくなりそうなくらいだ。けれども、単純作業に没頭していると時折感じるあの快感を、今回の作業でも感じることができた。

ファックスを初めて見た時には「文字なのに読めない」ことに気を取られ、難しい漢字ばかりでたらめに並んでいるのかと、なんとはなしに思っていた。けれども作業を終えた今、僕は、この絵がとても規則的に作られていることを知っている。いまだに上司は全然ピンときてないようだし、それも無理ないとは思うけれど、ちゃんと見れば僕のようなアートの門外漢でも構造を理解することができるのだ。

一番右の五行分は、前述したように「木火土金水」のそれぞれの部首を持つ、十九字ずつの漢字塊だ。最初の「木」群は「**⿳**」の形に並んでいて、次の「火」群はそれを九十度横に倒した「**⿲**」の形の配列になっている。その下の「土」はまた「**⿳**」で、「金」がまた「**⿲**」。交互に「**⿳**」「**⿲**」が繰り返されている。

一番左の五行分も、それと同じ漢字群、構造だ。つまり、「木火土金水」それぞれの部首の十九字ずつのかたまりで、「**⿳**」と「**⿲**」が交互に並んでいる。使われている漢字は、一つも重複していない。

右から数えて七行目から九行目までの縦の列は、その次の漢字塊の列だ。一番上は「木」群が「**⿱**」の形に七文字並んでいる。その下には「火」群が、「**⿱**」を横にした「**⿰**」の形に七文字並んでいる。以下また順番に、「土」「金」「水」「木」「火」が、「**⿱**」と「**⿰**」を交互に繰り返している。この縦の列には漢字塊が七個ある。

この続きが、十四行目から十六行目、つまりまん中の縦の列だ。「土」「金」「水」「木」「火」「土」の六個の漢字塊が、「**⿱**・**⿰**・**⿱**・**⿰**・**⿱**・**⿰**」と並んでいる。そしてそれは、二十一行目から二十三行目までの縦の列に「金」「水」「木」「火」「土」「金」「水」とつながっている。結局、これら三つの列には、七文字ずつの「木火土金水」が四回繰り返されて入っていることになる。

十一行目から十三行目までの縦の列と、十八行目から十九行目までの縦の列は、四文字ごとの正方形(**口**の形)の漢字塊の列となっている。「木火土金水」は左右の列に二回ずつ、計四回繰り返されて入っている。そして、これら二つの列に入っている漢字群がおそらく最も画数が多く、目を細めると一番濃く見える。たぶん、JISの漢字表から規則的に文字を取り出しているために、こんなふうに濃度が調整されているのだろう。通産省が決めたJISの文字コード表では、だいたい番号が大きいほど画数が多くなる。

ひとかたまりであってもおかしくはない。アニミズム的な発想だが、意味のような、あるいは生命のようなものが凝縮された形態が頭をもたげ、文字な

る単位のようなものだということは想像がつくし、それはちょうど、知らない人でも顔さえわかれば、なにかしらその人のことが想像づくことと似て

文字は色!?　そうするとこの絵は、色を使わな

がまた「卍」。交互に「卍」「卍」が繰り返されてい

規則的に文字を取り出しているために、こんなふ

うに濃度が調整されているのだろう。通産省が決めたJISの文字コード表では、だいたい番号が大きいほど画数が多くなる。

それに対してひらがなは、画数が少ないため一番薄く見える。そして、倒立しているものを仔細に見ればなんのことはなく、右上から縦に「あいうえおかきく……」という順番で並んでいる。旧字の「ゐ」や「ゑ」も入っているが、「ん」は入っていない。五十一音ではない五十正音が、数回繰り返されて漢字塊と漢字塊のすきまを埋めているかっこうだ。画面左下の制作年と署名(データ内署名?)は、本来ひらがなが入るべき場所に入っている。

どうやらこの作品では漢字が主役であり、ひらがなは脇役にすぎないようだ。

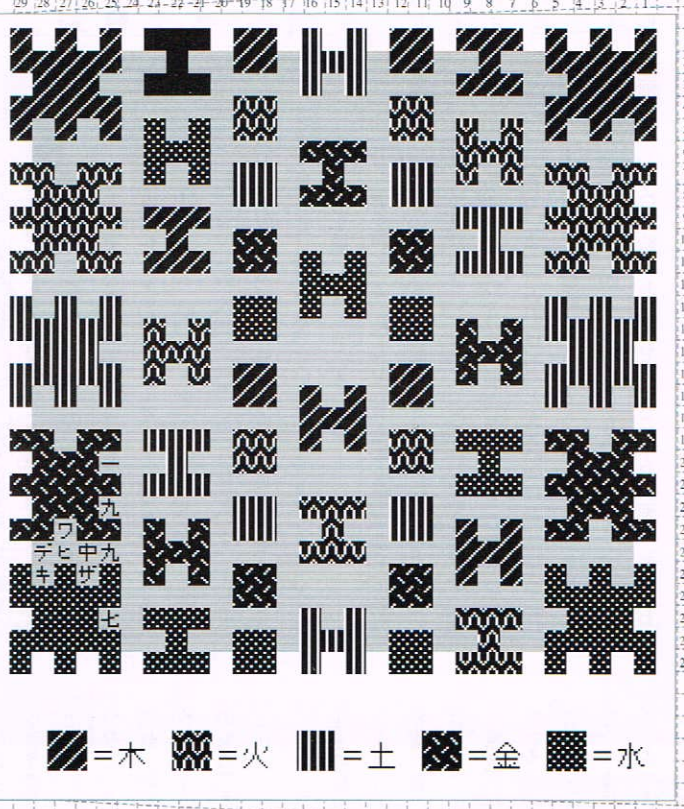
たしか昔は字を名と言い、漢字が真の名すなわち「真名」と呼ばれ、ひらがなとカタカナは仮の名すなわち「仮名」と呼ばれて差別されていたと聞いたことがあるが、倒立の、第二の理由かもしれない。作者もそんなことを考えているのだろうか。

主役の漢字の話に戻ると、作業しながら思ったのは、漢字が顔のようなひとかたまりに見えるということだ。字面さえわかれば、知らない字であってもそれがなにかしらの意味を発する単位のようなものだということは想像がつくし、それはちょうど、知らない人でも顔さえわかれば、なにかしらその人のことが想像つくことと似ている。昔の貴族の女性は名と顔を常に隠し、男性に体を許すときだけ名を告げ顔を見せたというが、なんだかわかるような気がする。

それに、中国ではもともとは漢字ひとつで一個の単語を表わしていたようだから、ひらがなやアルファベットなどとは違って、文字一個が意味上のひとかたまりであってもおかしくはない。アニミズム的な発想だが、意味のような、あるいは生命のようなものが凝縮された形態が顔であり、文字なのだろう。

そしてそのことをこの作品にからめて言えば、漢字の部首や部品だけでも時には一個の顔や文字のように見えることがある。それどころか、「口」「日」「工」「卍」「卍」のような漢字塊も、それぞれが一個の顔や文字のように感じられることがあるのだ。漢字塊が全部正方形だったら気づかなかったかもしれないが、「日」や「卍」のような形にはなにかしら引っかかりや表情があり、どことなく顔っぽい。さらに作品全体を遠くから眺めると、正方形型のこの作品自体も、一個の顔、あるいは文字のように作られているのかなと思う。だとすれば、これは「顔」の入れ子構造とでもいうべきだろうか。部首の顔が集まって漢字の顔となり、漢字の顔が集まって漢字塊の顔となり、漢字塊の顔が集まって作品の顔となっているわけだ。

顔が漢字の一文字のようになんらかの意味をなすものだとするならば、この作品は「木」群、「火」群、「土」群、「金」群、「水」群の漢字塊が均等に含まれた世界を意味するはずである。五行を五大元素とする古代中国の世



←『二九字二九行の文字座標型絵画第一番』1997
(作品構造図)

アイコンというのは、コンピュータの画面上で書類ファイルやフォルダを視覚的にわかりやすくする、小さな絵の記号のようなもの。その絵は、さらに小さな画素（ピクセル）と呼ばれる微小の正方形の色の点がたくさん集まってできているわけだ。通常のアイコンは、縦に画素が三二ドット、横に画素が三二ドットの大きさ以内で作られている。そして、好みのアイコンを自分で作ることもできる。僕もときどき、会社で使っているマッキントッシュで、アイコン画を描いて遊んでいるんだ。

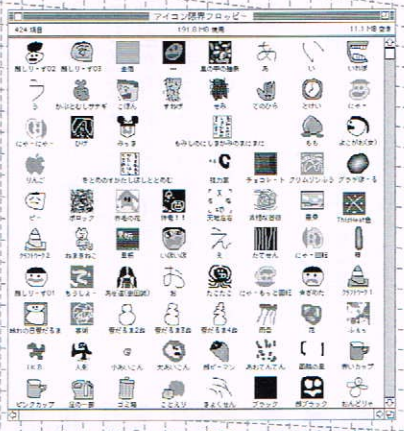
アイコンって、絵として見た場合には決して特殊なものではない。通常のCGの絵に比べて、たんにサイズが小さいだけ。たとえばパソコンモニタの画面は縦四八〇ドット、横六四〇ドットの画素からできている（最近のはもっと大きい）けど、アイコンはさっきから説明しているように、縦と横にそれぞれ三二ドット四方というだけなのだ。そして、大きなCGの絵であっても小さなアイコン画であっても、結局、画素をひとつずつ色づけしていく作業が、絵を描くことであるということには変わりない。アナログの場合、絵とは、絵の具という色彩の物質を連ねて、たとえば顔のような形態を描いたものを指すけれど、デジタルの場合も同じで、色彩の画素を連ねてなんらかの形態としたものが絵なのだ。そして、小さなアイコン画を描きながら僕がわかったことは、三二ドット四方というデジタルの狭い世界でも、十分いろんな絵が描けるということだ。

この「二九字二九行の文字座標型絵画第一番」は、縦横に三つほど画素数が足りないアイコン画だというふうにも言えなくもない。個々の正方形のドットを縦横に二十九個ずつの正方形として並べ、ひとつひとつを色のドットの代わりに文字を挿入して連ね、顔を生成したわけだ。タイトルに「絵画」とわざわざ銘打ってあるのは、構造としては絵画そのものであるということをはっきりさせるためだろうか？

しかし文字を連ねたアイコン画が、油彩画などと並ぶ絵画だということは、やはり僕の上司のような人にはわかりづらいような気もする。高校の教科書に載っていたスーラの点描画を引き合いに出せば、ちょっとはわかりやすくなるのかしら……。

原色の色彩の粒をたくさん並べて人や犬を描いているスーラの油絵を見たとき、僕は、物質は無数の分子の集合体であるという原子論を思い出して、なるほどなと感心したものだった。だからパソコンのペイントソフトに初めて触ったときも、これは個々の正方形ドットを色彩の分子とする、点描画の原理なのだということが、すぐに理解できた。

こう考えれば中ザワさんのこの作品も、原子論的な考え方にもとづく色彩の点描画であることがよくわかる。文字世界の原色を「木火土金水」と設定し、個々の文字を色彩分子に見立てた上で、世界の顔を描こうとしたのだろう。



中ザワヒデキ「アイコン限界フロッピー」（一部）

ライトボックス完成

問屋に発注していた蛍光灯が届いたので、さっそく出来上がったばかりのライトボックスにセットして、点灯してみた。眩しさの中に、カッティングシートならではのエッジがきりりと白黒で浮かび上がり、界観に照らし合わせれば、まさに全世界が曼陀羅のようにこの作品に集約されているわけだ。これは、文字体系を使用した世界風景画と言えるのかもしれない。

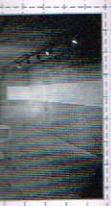
色と顔の文字絵画

送られてきたファックスによると、この作品は画廊や美術館では「二九字二九行の文字座標型絵画第一番」というタイトルで発表されるらしい。「二九」という字数には一見何の意味もなさそうだが、「木」という漢字塊が五字分のスペースを取って、それが「木火土金水」の五個あって、さらに漢字塊と漢字塊のすき間をひらがなが一文字ずつ埋めるとすれば、5×5＋4でたしかに二十九となる。

しかし、そういうデータサイズとしての話ならば、僕がすぐに思い出す近隣の数字は、コンピュータのアイコンの画素数が三二ドット四方ということだ。

ド表を絵の具箱やカラーパレットに見立てる画家がいても、理屈の上ではおかしくないのかもしれない。

画第一番」1997



作者撮定

色彩を重視した画家ドラクロワは、コンスタブルの描いた風景画の

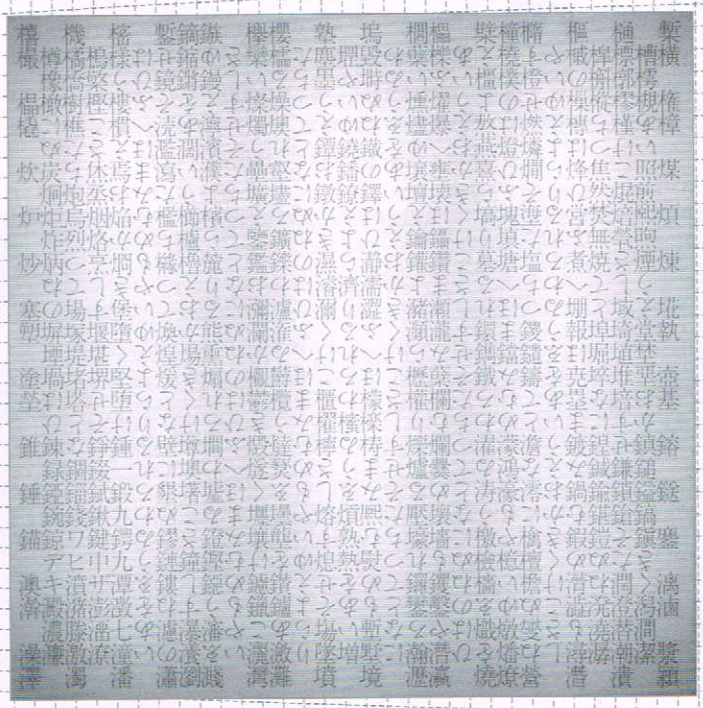
アイコンの画素数が三二ドット四方ということだ。

この「二九字二九行の文字座標型絵画第一番」は、問屋に発注していた蛍光灯が届いたので、さっそく出来上がったばかりのライトボックスにセットして、点灯してみた。眩しさの中に、カッティングシートならではのエッジがきりりと白黒で浮かび上がる。この瞬間が好きだ。

ライトボックスは消灯時の色みと点灯時の色みに差が出やすい。また、蛍光灯の種類によってもかなり色合いが違う。色というものは条件によって出方が全然違うから仕方ないのだけれども、極端なことを言えば人によっても感じ方が全然違うから、お客さまとのあいだでは色に関するトラブルが起こりやすい。だけれど、今回の中ザワさんの作品ではその心配がない。にもかかわらずこれが色彩画の原理でできているとするならば、むしろ文字こそ完璧な色彩だということになるかもしれない。たしかに文字なら、色彩工学や視覚生理に頼らずに済む。「論理の中の色彩」というようなことが考えられているのかしら……。

そして「世界風景」と言ってみたところで、実際の風景を探してくるよりかは、思考道具である日本語の風景のほうがむしろ完全な世界風景だと考えることもできる。古代中国の元素論に頼らなくても、かな漢字混じり文で記載される日本語文字群がうまく視覚化できれば、それこそ世界風景画だというわけだ。今ならワープロやワープロソフトで日本語が記載されるから、ワープロやパソコンに搭載されているJISコード表を絵の具箱やカラーパレットに見立てる画家がいても、理屈の上ではおかしくないのかもしれない。

さて、そろそろ梱包して明日の納品に備えよう。画廊の壁への取り付けが無事済めば、会社でお引き受けした仕事はこれで終わりだ。こういうものがアートなのかどうかはまだよくわからないけれど、この作品のことをなぜか僕に聞きたがっていた上司に、ある程度の説明はできそうだ。



←『二九字二九行の文字座標型絵画第一番』1997
（ライトボックス）

中ザワヒデキ個展「撮影：黒川未来夫
（ギャラリーNWハウス、東京、1997）

スーラ『グランド・ジャット島の日曜日の午後』
（中ザワヒデキ画）

作者補足

色彩を重視した画家ドラクロワは、コンスタブルの描いた風景画の木々がなぜ鮮やかな緑に見えるか解明しようとして、「〔〕種類でなくさまざまな種類の緑色が隣同士に置かれて互いに強めあっているからだ」という結論に達した。本作品で右上の「木」群が一瞬緑色に見えたとしたら、それはさまざまな木偏の文字が隣り合って置かれているからである。また、このエピソードからは、「色の感覚が「さまざま」という多数性に由来することも物語っている。それを「色々」と書くのは、偶然というよりは本質であろう。

スーラは、ドラクロワの研究を発展継承して、点描画という色彩画原理の極点を達成した画家である。つまり、世界は色彩の粒子でできているという原子論的な考え方を画面全体に押し広げた。これは後世、印刷技術のアミ点やテレビモニタの画素として、工業的に後追いされている。パソコンのペイントソフトもまさにこの考え方に依っていて、形態画原理にもとづくドローソフトとは好対照をなす。なぜならドローソフトは、世界を色彩ではなく形態からとらえるセザンヌのイデア論的な考え方を後追いしたものだからだ。

なお絵画の定義に、ここでは便宜的に「形態を生成したもの」という項も入れたが、近代以降の絵画論はその項を取り外したんに「色彩で覆われた平面」としている。さらに言えば、本作は世界との関連性を顕わにするタイプの作品だが、「こういうものがアート」かどうかについて言えば、世界連関は少なくとも美術の必要条件でも十分条件でもないと考えられる。